ある青春の十九日間

東京ー大阪三時間の現代、徒歩で東海道五十三次を旅行した青年がいた。何もそんなバカな真似をという人がいるかもしれないが、なぜ彼は敢えてそのバカな真似を実行したのだろうか？彼は確かめたかったのだ。果たしてつまらないものかどうかを。

その日東京の空は灰色だった。所は日本橋、三月に入ったとはいえまだ薄ら寒かったがそれでも道行く女性の装いには春は確実に感じられる日和であった。

そんな東京のど真ん中、スーツ姿の会社員やＯＬが足繁く通り過ぎる中、ヘンな男がしきりとカメラのシャッターを日本橋の道路原票に向かって切っていた。背には大きなリュック、その上にはテントらしき物、腰には手拭の山ルック。道行く人も場違いな存在に一瞥をくれるものの、すぐに無視して足早に通り過ぎて行った。

彼の名は持山保信、十九歳。東京ー京都間、五百十キロ徒歩旅行がいま正に始まらんとする日本橋のひとコマであった。

「ようし」、彼はそう呟くと元気に一歩を踏み出した。しかしその顔には単なる遊山旅行ではないんだという緊張した気配を隠す事は出来なかった。いやむしろこの先の長い道中、果たして辿り着けるか否かの憂いすら浮かべていた。

百メートル、二百メートル、彼はどんどん進む。一歩一歩また一歩。右手に東京駅を見る頃には、すでに彼の額には汗が浮かんでいた。

お江戸日本橋七つ立ち　初のぼり
行列そろえてアレワイサノサ
こちゃ高輪夜明けて提灯消す
コチャエ　コチャエ

コチャエ　コチャエは昔の話、彼は華やかな銀座も黙りこくって、何も見ずに通り過ぎた。そして彼の後ろ姿を柳だけが見送っていた。

横浜、藤沢、国府津、箱根、沼津と彼は前進した。最初の三日間は足をひきずりながら歩いた。箱根では大雨と霧に泣きべそをかいた。全身ビショ濡れになった。静岡

ではそれが祟って熱を出した。ペースも半分以下になり、もう中止したかったに違いない。今度の駅で列車に乗って帰ろうと何度思ったことであろうか。

彼は孤独であった。話し相手のいない淋しさから彼は自分とよく話をした。青春とは？　自我とは？　大学とは？　恋愛とは？　あらゆることについて自分と話をした。これまで物事をこんなに深く考えたことはなかった。

砕け散って行く青春のエネルギーの一部を考える事に利用する時、彼は何かしら楽しかった。無尽蔵の若人のエネルギーをこんなにも有効に利用しているのは久しぶりの事であった。心地よい疲労が彼を包んでいった。

或る日の午後、国道一号線というのにツクシンボが一本ポツンと春を告げていた。目ざとく見つけた彼は思わず次のような会話が交わされるのを耳にした。

「危ないよこんな所へ出てきては」
「ええ、でも知らなかったの、怖いわ私」
「気をつけてな」
「ありがとう、あなたもね、さようなら」

せちがらい現代、とかく無味乾燥的な心しか持たない現代の青年にとってこれほど

に潤いを感じさせる光景があっただろうか。

そうしているうちにも旅は続き、彼のテントの宿も島田、掛川、浜松、豊橋、岡崎、名古屋、桑名と移っていった。桑名で彼は二十歳の誕生日を迎えた。二十歳の感激は彼の薄暗いテントの中でも溢れんばかりに高まっていた。彼はその夜、夢を見た。箱根峠を下る時に見た美しい富士山の夢だった。

「アッ見えた！」思わず口にした言葉だった。三条大橋が見えたのである。彼はもう殆ど走っていた。息は切れそうであった。もう新幹線も飛行機も俺を追い越せない、俺はとうとう歩き通したのだ。いろんな考えが頭の中を横切るうちにもゴールはどんどん迫って来る。あと百メートル、五十メートル、十メートル、一メートル・・・・・・ヤッタ！

東京を出て十九日振りに彼はついに辿り着いた。重い荷物をしょったデンデン虫はやっとゴールインしたのである。しばし彼は呆然としていた。ただもう歩かなくても良い事だけが事実に思えた。東京を出る時は夢にまで見た京の三条大橋に、いま正に立っているにも拘わらず何も期待したほどの感動はなかった。

やっぱりバカな真似だったかと彼はフッと思った。そしてすぐに独り言を言った。
「バカな真似を確かめただけでも良かった。」
折からの夕日が橋のたもとで休む彼の痩せた細い肩を赤く染めていた。そして彼の吐くタバコの煙は十九日間の疲労をその一つ一つに乗せて真紅の大空へフワフワと浮かんでいった。彼は黙ってそれを見守っていた。

昭和四十三年　三扇寮文集　寄稿